

この1年、「麦の会」が考える算数・数学の実践を提案してきました。連載を終える今、算数・数学の実践は大変手強く、一筋縄ではいかないことを感じています。

それでも連載をするなかで、算数・数学の実践をすすめるうえで大切にしたいことが見えてきました。その第1は算数・数学の学習をすすめるとき、子どもたちが発達したいねがいを発見し、そのねがいにこたえることです。第2は科学的で系統性のある算数・数学の理論と先行実践に学びながらも、子どもがこれまでの学習で身につけた力を使って考え方解決し、新たな力を獲得していく学びのプロセスを大切にすることです。第3は一人ひとりの認識や思考を深めるため、子どもも集団で学び合い考え方などを大切にすることです。

品川文雄（元特別支援学級教員）

連載を振り返り、これらの点をみなさんと一緒に考えたいと思います。

◇ 算数・数学の学習をすすめるとき、子どもの発達したいねがいを発見しそのねがいにこたえる

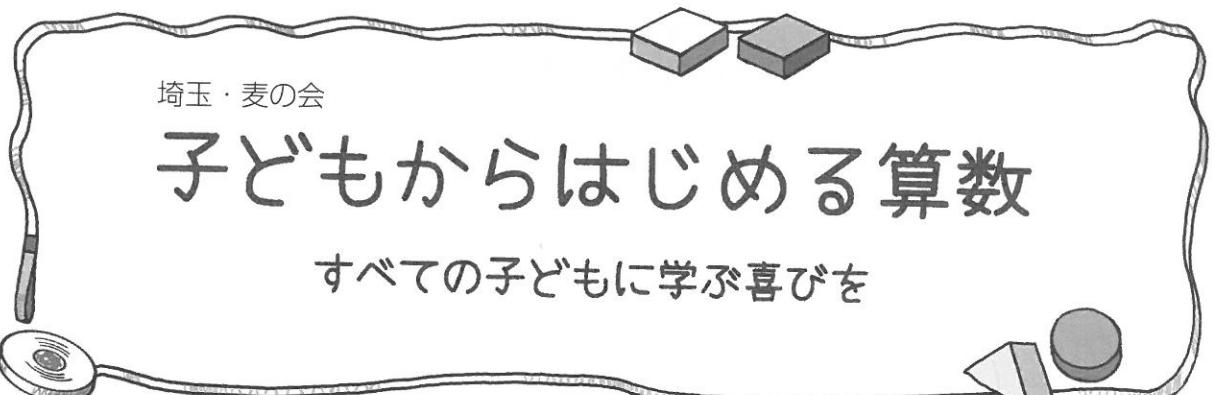
5月号の弘津さんは、「教室は、まるごとの自分をうけとめてくれるところ」を実感できる取り組みから出発しました。絵本の読み聞かせのなかで、ある子はごはんやウインナーの絵をつまんで食べ始め、ある子は先生の口元に絵本のごはんを持つていくと、先生が食べるまねをしてくれるのがうれしくて笑顔いっぱいです。

埼玉・麦の会

子どもからはじめる算数

すべての子どもに学ぶ喜びを

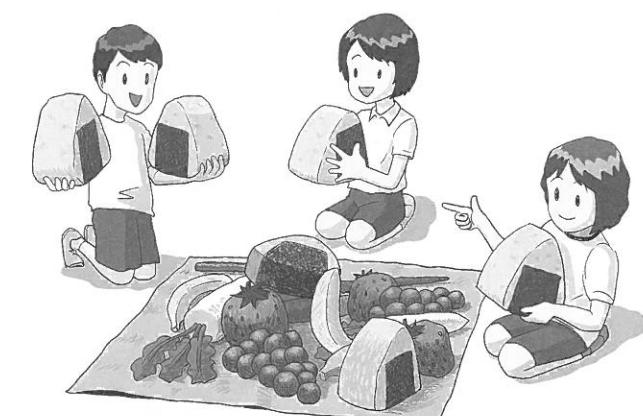
最終回 子どもからはじめる算数をすすめていく



に取り組むと、一気に力を開いていきます。北川さんは悩みながら愛さんの発達の姿をとらえ直し、その発達の課題にふさわしい算数の課題を見つけていきました。

◇ 科学的で系統性のある算数・数学の理論と先行実践に学びながらも、子どもがこれまでの学習で身につけた力を使って考え方解決し、新たな力を獲得していく学びのプロセスを大切にする

小島さんは子どもに寄り添いながら、一方で系統的な算数の指導の道筋をふまえ子どもが乗つてくる学習課題を用意します。10、11月号



に登場したりゅう君は「さんすう」といつただけで身体を硬くし泣き出すため、算数の授業ができませんでした。そこで取り組んだのが数遊びです。りゅう君もうすすを感じている（算数の要素いっぽいの数遊びゲームを小島マジックで「これは遊び、ゲーム！」と押し通し、みんなで遊び学びます。そのなかで、りゅう君は学ぶ喜びを感じ、「りゅう君つすごい」の友だちの励ましに気持ちがほぐれていきます。自然な笑顔が見えたところ、小島さんは算数の本格的授業を始めたとき、池田さんととらえ、課題と思う「10までの数を量としてとらえること」や「たし算やひき算の意味の学び直し」を行います。りゅう君はもう泣かなくなり、学習をリードするようになりました。

私たち、科学的で系統的な算数の指導の道筋を数教協の「水道方式」の理論と先行実践から学び、自分の実践に生かしてきました。だからといって「水道方式」の理論と先行実践をなぞって行うのではなく、その原理原則は学びつつも、子どもたちが発達したいねがいを発見し、そのねがいにこたえるために必要な内容を吟味し組み立て実践してきました。

池田さんの「2」と出会う（7月号）や「おはなしからはじめる「ひき算」（9月号）、北川さんの「集合数として10をつかむ」（12月号）はその典型的な実践といえます。

いになりました。食べるまねっこが好きになり、おいしいものの分け合いごっこが始まったとき、弘津さんは多くの子に「つもり・みたて」の力が育ちつつあります。

6月号の芝崎さんは、子どもたちが動き始め、友だち同士の関わりも生まれました。子どものねがいを知りたい、わかりたい、子どもと楽しい授業をしたい思いがあふれる報告でした。

発達したいねがいを発見しにくい子どももいます。8月号の愛さんは愛さんと出会ったとき、実態が見えにくく課題もつかみにくかったそうです。だから迷いながら実践をすすめました。はじめ「感触を楽しんでいるかのように見えた」ととらえていましたが、算数の問題に取り組ませ確かめると、それは本当の姿でなく、それより高い発達のレベルであることに気づきます。そこで「もう少し高い発達のレベルであるが感触のレベルに止まろうと、それがベールの役割をし本当の発達の姿を隠している」ととらえ直します。本当の発達レベルと思われる算数の課題